

## 隊員報告書

第 号 ( 3 6 カ月目 )

平成 9 年 4 月 4 日提出

ヨルダン国派遣 平成 5 年 3 次隊 職種 電子機器 ( 8 年 1 0 月 / 9 年 4 月分 )

インドウヒツ 配属先・住所 National Electric Power Company ( 電力会社 )  
氏名 遠藤浩史 Head Quarter, 7th Circle, Zaharan Street

### 業 務 内 容

#### (A) 最終総合報告

##### a) 延長を含め実施計画から見た協力活動のまとめ

#### コントロールセンタ

赴任当初から勤務した National Control Center での隊員活動は、隊員報告書号及び 号で報告した通り、技術的な問題よりも道徳的な問題が多い。

業務の改善を妨げている原因の多くは技術が不足しているからでも資金が不足しているからでも無い。人間の道徳的な資質の問題であると考えている。

経験豊富で技術的にも充分能力のあるテクニシャンがおり、彼がこの職場の業務の内容を充分こなせるわけだが、彼以外のエンジニア、テクニシャンはあまり業務に積極的でなく、また職場長が全く別の分野の専門なのでこの不均衡を是正出来ないことは技術的な問題とは言い難いし、ボランティアの立場では如何ともし難い。

赴任してしばらくして始めた P C B (Print Circuit Board) のコンピュータによる作製は、導入したパーソナルコンピュータを使いなんとか出来るレベルに達した。本来ならばソフトウェアも導入し、更なる前進を図るべきなのだろうが、職場長があまり積極的にこの問題に取り組む姿勢を見せない、ソフトウェアを評価するコンピュータが手に入らない(\*)、等の理由により実施出来なかった。しし今の状況で

もある程度(PIN間2line,PIN数200くらい)の基板は作製出来る(隊員報告書第 号参照)ので、一応の成果があったとすべきだろう。

(\*)前回の報告書に記した支援経費にて導入した機器の件は、結局は配属先の登録を抹消するには至らなかった。最後まで自由に使えることはなかった。しかし前回の報告書提出後、調整員が配属先と話し合いを通じてこの件を抗議したが、解決には至らなかった。結果としては不満が残るものの事務所の対応は充分評価できるものであり、大野調整員をはじめ、ジョルダン事務所には大変感謝するところである。

### 電算情報課

ここでの活動は、先のコントロールセンタでの活動の一部とオーバーラップする部分があるのだが、ネットワーク構築作業のための活動で、ようやく念願のWindows95のarabic版が発売になった。これによってネットワークの作業は飛躍的にやり易くなった。

しかし、職場では未だに新しいソフトウェアに対応出来ずに、古いものにしがみついて作業しているものも少なくない。新しいものは古いものに対して単純で判り易くなっている点を考えると、単に頭が固いだけの様な気がする。(こういう人は日本にも沢山いる様な気がする。)

WindowsNT\_Server Ver4も今後アラビア語サポートを表明しており今後はServerソフトウェアの中心的存在になってくるに違いない。現在、配属先はNetwareを利用してネットワークの構築を考えている様だが、作業の煩雑さから私は薦めていない。しかし今日までNetwareを勉強しつづけた技術者に、いきなり変えろと言っても難しいのは充分理解は出来る。

本質的にはさほど変わらないので便利で、将来性が高い物を利用した方が良いのだからなるべく頭を切り替えて欲しいのだが、なかなか頭が固くて難しい。

さて、具体的な活動としては、Windows95と周辺ソフトウェアの導入用のCD-ROMを作製し、これを用いて機械に組み込む作業の指導を行った。然程難しい作業ではないのだが、なかなか覚えられずに苦労していた様だが最近は何とか自分達で出来る様になってきた。今後は充分な作業が出来る様になると期待できる。

これらネットワーク関係の他に、通信用ICのテストを作製しハードウェアの理解と修理技術の向上を図る活動を行った。延長時の計画にあったPC(ProgramableControler)の作製までには至らなかったものの、ハードウェアに触れることの少ない技術者の興味を引き多少なりとも理解が得られたのは収穫であったと思う。また、作製したテストも治具として今後も利用活用出来るもので、修理の作業に役立つものになるだろう。今回この資料の添付が間に合わないのが残念だが、

形の残るものが配属先に残るのは何となく嬉しいものである。

#### b) 専門業務以外の協力活動のまとめ

配属先及び事業団の理解と了承を貰い、週に一度行っている"盲学校"での活動は、後任者が決まっていない点で非常に不安であるが、一応3月の終わりにて終了した。ただし国連からは引き続き指導者を派遣しており、また4月以降は更に人員をもう一人増やして2人の派遣になるようである。

この3ヶ月間はここでの自分の活動は、日本政府からの"草の根無償援助"で点字の印字のためのプリンタを導入出来ることになり、ほとんどがその準備に取られてしまった。しかし結果としてこれらの器材を早期に導入出来る事になり、それなりの結果があった様な気がする。

この器材導入に伴い、在ヨルダン日本大使館の皆様から大変な助力を頂いた。木村大使をはじめ、足木参事官、担当の安田職員にはお礼の言いようも無く、学校側の職員共々ここに改めて謝意を記すものとした。

今後この盲学校に入る隊員には、より一層の協力活動を期待したい。この報告書にあれこれ書くことによって、今後の隊員の活動を制限することになるのはあまり良いこととは思えないので細かい希望等は記さない。

## 一 般 概 況

#### a) 全活動期間の協力隊活動を振り返って

赴任当時は、色々戸惑うことも多く、また言葉の問題で色々苦労したことも多かった。しかし1年が過ぎた辺りから徐々に慣れ友人も出来て任国での生活、隊員の活動もスムーズになってきた。

実際の隊員活動では、丁度2年目の終わりに、業務でヨルダンに来られた前任者と配属先で会うことが出来て、自分が配属先でやってきた事が方向として間違っていなかったことを確信出来たことがとても嬉しかった。また電算情報課でのカウンターパートのイマド=アラビアットさんには多大な協力を得られ、後半の隊員活動が極めて質の高い且つリラックスした状況で出来たことはこの上も無い幸福であったと言えよう。

隊員の有志で行っている人形劇では、私が普通の活動では知り合うことの出来ない様な人たちと知り合え、また、私が普通の生活では知り得ることの出来ないヨル

ダンと出会えた。この辺りは今後の人生に必ず役に立つものと思っている。

また、現地の国際協力事業団の職員、日本大使館の方々、そしてヨルダンに在留されている日本の商社の方々からは大変なご協力を頂き、感謝の念に絶えない。

また、仕事で、或いはそれ以外で知り合って仲良くなったヨルダンの人達も忘れられない存在だ。ヨルダン(アラブ)では親しい人間同士の関係を大切にするので、本当に親切してもらった。帰国の挨拶をする度に "空港まで送って行ってあげる。" と言われることが多い。全く嬉しい限りだ。

アラブの世界。赴任まで全く知らない世界であったところが、最近になってようやく理解出来る様になってきた。イスラムと古くからの土着の習慣とが色々な形で近代化を妨げ、怠惰で閉鎖的で自己主張が強く我が侷な人間性が他の文化の流入を阻んでいるのだが、その反面、親しい人同士の触れ合いを重んじ、家族や親戚を大切にしている今の日本人が忘れてしまった部分を今も持ち続けている。そんな世界なのである。

そのアラブにはアラブなりのポリシーがある。お仕着せの技術協力等は望んでいないのである。彼等が何を望むのか今後も時代によって変わってくるだろうが、それを見極め我々が出来ることを、時代時代に応じて対応しなければいけない様な気がする。

自分のやってきた事が果たしてヨルダンの人達が望んだことなのかどうか判らないが、全力でやってきたことの結果であり、誰かがいつか理解してくれることと信じている。

## b) 協力隊事業への提言

自分が協力隊に参加した動機の一つに理由に以下の様な理由がある。

協力隊参加以前、会社勤めをしていた時のことである。ブラジルの顧客を訪問した際に、機械の故障で困っているので見て欲しい...との要求があり、その機械を看に行った。するとそれは他社の機械であり、ライバル会社のものではあった。自社の看板をしょって行っているのですからまさか他所の会社のものを直すわけにも行かず、諦めてもらわなければならないことになった。

しかしそれは技術的な問題でも何でも無い、立場の違いで修理することが出来なかったのである。そしてきっと自分が看れば修理することが出来たに違いない。この様な立場の違いを超えて、企業の利害を超えて、協力出来る何かが無いか...と言った理由だ。

確かに協力隊隊員の立場は企業の利潤追従とは無縁ではあるが、政府間の協力であるので配属先が政府機関であり、同僚は公務員である。

途上国のほとんどは、肥大した政府機関と貧相な民間企業があり、産業を発展させるためには民間の生産性を上げて行かなければいけないならば、むしろ民間の産業を援助して行かなければならないと考えている。とすれば、やはり協力隊隊員の立場ではその様な民間の援助が難しいので、その辺りに今後の協力隊事業の糸口があるのではないだろうか？

ここヨルダンでも多くの困っている小さい会社を見た。出来る範囲の手伝えることはやったが、現実には対した事が出来なかった。今後の協力隊の活動の方向性に期待したい。

## おまけ

以下は、余談である。

ヨルダンの隊員機関紙に自分が載せた記事なのだが、自分の考えている協力隊員の立場を上手く現しているので添付する。特に上記までの内容との関連はない。

### ウルトラマンの国際協力

(略)

実は最近、私はこの"ウルトラマン"の物語が、青年海外協力隊員の活動に多くの類似点があるのではないかと考えているのである。

ウルトラマンの根底にあるストーリーはこうだ。とある M78 星雲の宇宙人は、宇宙の墓場に凶人(獣?)を護送の途中に逃走され、これを追って地球に来た。

彼(宇宙人)は地球の大気圏内での追跡中に、誤って一人の地球人の命を奪ってしまう。そして彼はこの地球人に自分の非を詫び、地球人に自らの命を与え、地球人と一心同体になって地球に留まる決意をする。

そして長い間、彼は地球人の為に働いた。あるときは大自然の猛威と戦い、あるときは侵略者の魔の手から我々を救ってくれた。それは結果として地球人達の大きな励みとなり、地球人達は自分の力だけで多くの災害から身を護る手段を得てゆく。

遂に我々地球人の力が彼の能力を上回った頃、彼は力尽き倒れてしまう。ちょうどそのとき、

自分の星から仲間が迎えに来た。ところが彼は自分が帰ってしまうと一人の地球人が死んでしまうことを理由にこれを断るのである！

迎えに来た宇宙人は、「地球の平和は地球人の手で掴むことに価値がある。」と説得すると、彼は自分の命を地球人に与え、自分は死んでもかまわない、とまで言った。

このストーリーは、全部の39話を通じて見ないと判り難く、途中の一話だけ見ても全体は掴めない。また、後年になって作られたリメイク版は、この様な殻になる部分が違う為に優れたドラマに成り得なかった。

もし、何かの機会にウルトラマンを見ることが出来れば、もう一度こういった点で注目してもらいたい。

この脚本を書いた金城哲夫という人は、沖縄出身で製作プロダクション専属の作家だった。ウルトラマンから数年後、本土復帰前の沖縄に戻る。沖縄海洋博覧会の企画に参加したが、事故で亡くなってしまう。

その鋭い着眼点や、未来を見据える優れた想像力ゆえにか、ここ10年の間に再び注目されており、放送関係者は勿論、若い世代からも高く評価されている。今日ではその活動の足跡が研究されて、数々の図書が出版されている。

朝日新聞社から発行されている「ウルトラマン昇天」山田輝子著は、金城哲夫という人の人生をドキュメントしたもので、興味がある人は是非一読して頂きたい。

ウルトラマンがこの地球にやって来た理由はまったくの偶然だ。かつて彼にとっては、地球は宇宙に数多くある星屑の一つにしか過ぎなかった。

また、地球に留まった理由は、彼の人道的立場からであり、誰からも望まれたものではない。つまり全くの"ボランティア精神"から彼は地球の為に働きたいと望んだのだ。(宇宙船が壊れて帰れなくなったと言う事実もあるが...(^^))

そして、結局はこの地球が好きになって、たった一人の地球人の命のために自分の命さえも惜しくなくなってしまった。

遠い故郷を離れ、たった一人で別の惑星で働く彼こそ、奉仕精神溢れる協力活動の基本を地でいっているボランティアだ！

ウルトラマンは只無条件で、奉仕しているわけではない。人間が努力して、一生懸命に頑張っているときにだけ力を貸してくれる。ストーリーの中にはこれについて描かれた話もあり、また地球人が無力でないことも描かれている。

我々地球人がどんなに優れた道具を作り出して、大自然の猛威や、外宇宙からの侵略に立ち向かったところで、結局はウルトラマンがいれば良いのではないか？いつでもウルトラマンが助けてくれる…。

しかし彼の答えはこうだ。地球人がカー杯戦っている時にだけ、ほんの少しだけ力を貸してくれる。そしてまたウルトラマン自身も無敵ではなく、彼だけの力では立ち向かえない、我々の努力があって始めてウルトラマンの勝利がある。

赴任先の自助努力があってこそ始めて協力活動がなされるのだ！協力隊の隊員だけでも無く、赴任先の職員だけでも無く、両方の力を合わせあって始めて可能になる物…それが協力だろう。

(略)